

2024年4月14日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

イザヤ書 50 : 10  
マタイによる福音書 4 : 18~25  
「イエスさまに従う」

【招詞】 イザヤ書 35 : 1~2

【讃美歌】 27 「父、子、聖霊の」

【詩編交読】 詩編 38 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。  
わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讃美歌】 352 「来たれ全能の主」

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 50 : 10、マタイによる福音書 4 : 18~25

【説教】 「イエスさまに従う」

<山上の説教の前提>

今日からわたしたちは、主の日毎に、マタイによる福音書から「山上の説教」と呼ばれている部分の御言葉を、丁寧に聞いていきたいと思えます。

聖書にあまり触れたことのない方でも、「山上の説教」という言葉は、聞かれたことがあるかも知れません。5章から7章まで続く、イエスさまの長い長い説教です。

その説教を、イエスさまは、「心の貧しい人は、幸いである」という言葉で語り始められました。そして、こういう人は幸いである、こういう人は幸いである、と8回繰り返されるのです。ですから、この部分は「八福の教え」と呼ばれることもあります。

これからは、毎週その「幸いである」との御言葉を、一つずつ聞いていきたいと思うのです。

でも今日は、その「山上の説教」の内容に入る前に、イエスさまがどういう人々に対して、この「山上の説教」を語られたのか、ということを知っておきたいと思えます。

今日読まれた 4 : 18~25 は、この「山上の説教」が語られた背景となる場所なのです。

<従う>

この 18 節から 25 節のところは、一つのテーマがあります。それは、「イエスさまに従う」ということです。ここには、大きく二つの「従う」場面が語られています。一つは弟子たち、もう一つは大勢の群衆です。

まず、18~22 節のところでは、二組の兄弟が、イエスさまの弟子となって従ったことが語られています。

最初の 18～20 節では、ペトロとアンデレが、イエスさまに「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われて、「二人はすぐに網を捨てて従った」とあります。

そして続けて、21～22 節には、イエスさまがヤコブとヨハネを「お呼びに」なり、「この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った」とあるのです。

そして、23～25 節では、イエスさまが「ガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」とあり、最後のところに、「大勢の群衆が来てイエスに従った」と語られています。

イエスさまが来られ、お呼びになり、彼らは従った。イエスさまが来られ、み国の福音を宣べ伝え、いやしてくださり、群衆は従った。

ここに、「イエスさまに従う人々」が興されているのです。

そして、この、ご自分の御言葉を聞いて、呼び掛けを聞いて、応答し、従ってきた人々に対して、イエスさまは、「幸いである」と語りかけ、説教を始められたのです。

<従ったと言える？>

さて、わたしたちは、ここで二組の「従った」人々を見ることが出来ます。

まず、弟子たち。イエスさまに呼びかけられて、網を捨てて、舟を捨てて、父親まで捨てて、すべてを捨てて従った、とあります。わたしたちは、これこそ、イエスさまの弟子の姿だ。従う者とは、こうあるべきだ。そう思うかも知れません。

でも、そう思うと、自分はこの弟子たちのように従うことは難しい。何もかも捨てて、すべてを置いて、その場でイエスさまに従っていく。そんなことは、自分には出来ない、と感じるかも知れません。

一方で、大勢の群衆。逆に、彼らは、「従った」と言って良いのでしょうか。

彼らは、ただただ、病気がいやされたかっただけなのではないか。イエスさまが神の子であり、救い主である、と信じたわけではなくて。ただ、自分や、あるいは自分の愛する者が捕らわれている苦しみ、悩みから解放されたかった。イエスさまが、病をいやせるお方だと聞いて、藁にもすがる思いで駆け付けた。あるは病人を連れて来た。

それは、病をいやしてもらおう、というご利益が目的であって、果たして「イエスさまに従った」と言えるものなのだろうか。従う、というには、不純な動機ではないだろうか。そんな疑問を持つかも知れません。

でも、どちらにせよ大切なのは、まず、イエスさまの呼びかけが先だった、ということです。

弟子たちの場合は、実は、直前の 4:17 に、イエスさまが伝道を始められたときの、最初の御言葉が語られています。こうありました。「そのときから、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、宣べ伝え始められた。」

その直後に、イエスさまは二組の兄弟を呼び、ご自分の許に招かれたのです。

そして、大勢の群衆の場合には、23 節に、「イエスは、…御国の福音を宣べ伝え」とあり、それから、「民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」とあります。

イエスさまは、まず人々に、御国の福音を告げ知らされたのです。

「天の国」、「御国」とは、「神の国」のことであり、「神さまのご支配」の事です。

わたしたちが、罪と死の支配から解放され、神さまの愛のご支配の中で、神さまとの親しい交わりに生きること。それが、天の国、御国であり、神のご支配に生きる、ということなのです。

神の御子イエスさまは、そのような神のご支配を、わたしたちの上に実現するために、父なる神さまから遣わされて、この世に来られました。

イエスさまは、ご自分の十字架の死によって、わたしたちを罪から解放し、神さまの愛と恵みのご支配へと招いてくださるために、救い主として、わたしたちのところに来られました。

まさに、イエスさまにおいて、神の国、神のご支配は、わたしたちの間に打ち立てられ、始まっていくのです。

「天の国は近づいた。」イエスさまは、伝道の初めに、そのことをまず宣言され、「悔い改めなさい」、わたしの許に来なさい、と呼びかけられたのです。

この呼びかけには、神の権威があります。この方は、神の御子であり、神さまが遣わされた救い主です。そして、イエスさまの御業は、神の力による御業です。

病をいやすその御力も、イエスさまが「神のご支配」を打ち立てられ、御国が来たことの「しるし」としてなされていることなのです。

この「御国」への呼びかけに応じて、イエスさまの許に、大勢の群衆が来たのです。

彼らは、日々の生活に困難を覚え、悩みを抱え、病に苦しんでいた人々です。何とかこの苦しみから解放されたい、と願っていた人々です。

そこに、イエスという方が来られた。その方は、神の国を告げ、病をいやしてくださるという。苦しみから解放してくださるという。とにかく、多くの者たちが実際にいやされている。だから、自分ももしかしたら、いやしていただけるかも知れない。苦しみが、和らぐかも知れない。少しでも楽にさせていただけるかも知れない。

イエスさまの許に集まってきたのは。御言葉を聞いて、御業を見て、そのような、一縷の望みをかけて。藁にもすがる思いで。イエスさまならもしかしたら、と信じて、期待して、やって来た人々でした。

確かに、それは「信仰」と呼べるものではなかったかも知れません。イエスさまの「御国の福音」を信じた、とは言えないのかも知れません。

でも、わたしたちが「信じる」というのは、自分の「信じる」思いの強さによって可能になることではないし、頑張っただけで出来ることではありません。相手が詐欺師だと分かっている、その相手を頑張っただけで「信じる」、なんて言うことは、あり得ないのです。

わたしたちが「信じる」ことが出来るのは、相手が信じるに足る人物だからです。

わたしたちが、「信じる」ためには、「信頼する」ためには、相手の誠実さ、相手の確かさが、重要なのです。

そして、イエスさまは、イエスさまこそは、人々にとって、頼り、信じ、すがって、救いを求めるのに、十分にお応えできるお方。信じるに足る、唯一のお方なのです。

人々は、イエスさまが告げてくださる御国の福音に、そしてその神のご支配の「しるし」として、人々をいやされた神の力に、「信じる」思いを引き起こされました。

この方に、自分の病を託してみよう。この方に、愛する者の苦しみを託してみよう。そう思わされたのです。

そして、イエスさまのところに来た。

半信半疑の者もあったかも知れません。諦め半分で、でも最後の望みと思って、来た者もあったかも知れません。

でも、彼らが病や痛みや悩みを抱えてやって来たのは、確かに、神の御子であり、救い主として来られた方、イエスさまのところだったのです。

イエスさまは、ご自分のところに来た人々を、みんな受け入れてくださいました。そして、これらの人々の病をいやし、痛み悩みから解放してくださいました。

イエスさまは、ご自分を頼って来た人々に、すがってきた人々に、「あなたの信仰が、あなたを救った」と言ってくださるお方です。

あなたは、わたしのところに来た。あなたは、わたしを頼って来た。あなたは、わたしがあなたの苦しみを解放することができるかと信じて来た。それでよい。それが、あなたの信仰だ。そして、まことに、わたしはあなたを救う。そう言ってくださるのです。

そして、あなたは、わたしに従う者だと、言ってくださるのです。

イエスさまと出会った人々の内には、語りかけられたイエスさまの御国の福音が、響いてくるに違いありません。

そして、まことの救いとは、一時的な病のいやしや痛みからの解放ではなく。罪から解放され、死の支配から解放され、主なる神さまのご支配のもとで、生きる者となることである。永遠にわたしが神さまのものとなり、生きるにも、死ぬにも、神さまが共にいてくださることである。

そう知らされていくでしょう。

…こうして、イエスさまの御言葉によって。イエスさまの御力によって。大勢の群衆が、イエスさまに従う者とされたのです。「幸いである」と、言われる者とされたのです。

<イエスさまに呼ばれて>

さて、そうであるなら、弟子たちが従ったこともまた、彼らが立派だったから、特別だったから、そうなったのではありません。

彼らは、すぐにイエスさまに従う、その決断、その覚悟ができるから、という理由で、弟子に選ばれたのではないのです。

逆に、彼らに弟子になるふさわしい条件や、理由はありませんでした。

ただ、イエスさまが一方的に選び、呼びかけ、招かれたのです。

彼らは、普通の日常の営みの只中にいました。この二組の兄弟は、漁師でした。昨日も漁をして、今日も漁をして、明日も漁をする。そんな日々が続いていくと思っていたことでしょう。その日々に、それぞれの、生活の困難や、悩みや、思い煩いも、少なからずあったことでしょう。

でも、その日常の只中に、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と宣べ伝える方が、やって来られたのです。イエスさまの方から、彼らの日々の中に、踏み込んで来られたのです。

そして、「わたしについて来なさい」と呼びかけられたのです。

神の御子の、呼びかけです。救い主の、招きです。神の国をもたらす方の、御国の王たる方の、救いへの招きです。

このイエスさまの呼びかけにこそ、イエスさまの招きの御言葉にこそ、人を立ち上げらせ、応答させてくださる、その力があるのです。

ですから、彼らは、イエスさまの呼びかけに、招きに、応えたのです。

網も捨てて、舟も、そして父親も残して、彼らの生活、糧となるもの、家族、そのすべてを捨てて、従ったのです。

しかし、この「捨てて」というのは、ぞんざいに扱うとか、不要なものとするとか、大切にしない、という意味ではありません。

そうではなくて、他のあらゆるものを置いて、イエスさまが、自分のすべての最優先になる。イエスさまを、自分の人生の中心にする、ということです。

自分で自分を支配し、自分の思いに従って生きる人生から。イエスさまが自分を支配し、イエスさまの御心に従って生きる人生になる、ということなのです。

ペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネの兄弟は、ただ、このように、神の御子イエスさまが、呼びかけてくださったから。人生の主、命の主、わたしの主となってくださる方が、招いてくださったから、従う者とされたのです。

そして、そのようにイエスさまに従っていくということが、まさに「悔い改める」、ということなのです。イエスさまの方を向かなければ、イエスさまに従うことは出来ません。反対の方を見つめたまま、イエスさまに付いて行くことは出来ません。

イエスさまに従う時、わたしたちは、自分自身の人生の方向を、イエスさまへと向けていきます。生活に、仕事に、病に、家族に、自分に、色々なところに向いていた心を、一筋に、イエスさまへ向ける。神さまへ向ける。

それがまさに、「悔い改める」ということなのです。

イエスさまに従うことと、悔い改めることは、表裏一体です。そして、イエスさまと共に生きていく者となる。神さまの愛と恵みの中で生きていく者となる。

それこそが、天の国、御国、神のご支配の中で生きてゆく、ということなのです。

<担われて>

そして、すべてを捨てて、イエスさまに従っていく、その歩みとは。イエスさまに、わたしのすべてを担われて、歩んでいく。そのような歩みに他なりません。

イエスさまは、わたしたちを救うために、来られたお方です。イエスさまは、わたしたち苦しみを、悩みを、罪を、死を、すべてその身にお引き受けになるために来られたお方です。イエスさまは、わたしたちの罪の償いのために、命を惜しまず捨てられるお方です。そしてイエスさまは、わたしたちが御国に生きる者となるために、復活してくださるお方です。

わたしがあなたを救う。わたしの十字架に、あなたのすべてを担う。だから、「わたしについて来なさい」と、イエスさまは言うてくださるのです。

そのようにして、わたしたちの、生活の中に、苦しみの中に、悩みの中に、神のご支配を打ち立ててくださる、王なるイエスさまが来てくださるのです。

「わたしについて来なさい」と、一人一人に呼びかけてくださるのです。

わたしたちは、その呼びかけにお応えして。お招きにお応えして。このまことの救い主に、神のご支配を打ち立てて下さるお方に、罪を赦してくださるお方に、命を与えてくださるお方に、わたしのすべてを担い、いつも共にいてくださるお方に、喜んで従っていきたいのです。

21 節の最後の方には、イエスさまが「彼らをお呼びになった」と書かれています。

この「お呼びになった」という言葉は、ギリシア語で「エクレーシア（エカレセン）」という「教会」を意味する言葉が使われています。

イエスさまが、御国の福音を宣べ伝え、お呼びくださる。それにお応えして従う者が、イエスさまの許に来る。この、呼ばれて、来た者たちの群れが、まさに「教会」なのです。

「教会」は、イエスさまの呼びかけに、応えて従った者の群れなのです。

ですから、わたしたちも、そうなのです。神の国の御言葉を聞きました。救いへの招きを聞きました。「わたしについて来なさい」と、イエスさまに呼ばれました。

わたしたちを救うために来られた神の御子が、わたしたちの救い主が、十字架ですべてを担ってくださるお方が、「わたしについて来なさい」と呼んでくださいました。

そして今、わたしたちは、その恵みの呼びかけに応じて、イエスさまに従って、今ここに集められ、神さまを礼拝しているのです。今まさに、イエスさまに担われて、イエスさまと共にあって、神さまの方を向いて、生きる者とされているのです。

ここに、主に呼び集められた者の群れ、まことの教会が、あるのです。

こうして、イエスさまに従う者とされているわたしたちは、幸いです。

どのような時も、イエスさまが、わたしと共にいてくださるから。どのような重荷も、悩みも、苦しみも、罪も、イエスさまが担ってくださるから。神さまのご支配の中で、神さまに愛され、赦されて生きる者とされているから。そして、人を愛し、赦して生きる者とされているからです。

このようなわたしたちに、「幸いです」と、イエスさまは告げてくださるのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

イエスさまをお遣わしく下さり、御国へと招いてくださったこと。イエスさまが、「わたしについて来なさい」と、一人一人を呼んでくださり、今ここに、お招きに応える者として、集められていますことを、感謝いたします。

イエスさまに従うことの「幸いです」を、どうかわたしたちが、深く心に留めることが出来ますように。

日々の生活にあっても、悩みにあっても、苦しみにあっても、イエスさまが、わたしたちの重荷をすべてのその十字架の上に引き受け、担ってくださること。

いやしを与え、平安を与え、まことの「幸いです」に生きる道が与えられていることを、知ることが出来ますように。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 432 「重荷を負う者」

【信仰告白】 ニカイア信条

【十戒】

【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讃美歌】 28 「み栄えあれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン